

十五歳の少年はいじめで一人悩み続け、やっとの思いで「もう学校に行けない」と親に伝えたら「頑張り、強くなれ」と。「やっぱり僕が悪いんだ」。最後の命の綱が切れた。「死ぬのは怖くない。でも八十錠で死ぬ薬を五十錠飲んだ僕の気持ち分かる？」

「どんなに寂しかったらう」。弁護士会「子どもの人権救済センター」の相談で、子どもたちの壮絶な苦しみに打ちのめされた。ただ涙を流すしかなかった。その子は言った。「こんなに一生懸命聞いてくれる大人なんていなかった」。「話を聞いて一緒に悩むことならできるかもしれない」。それが原点にある。

坪井 節子さん(52) カリヨン子どもセンター理事長
弁護士

彼女たちのストーリー

少年事件にかかわって、子どもたちの生い立ちをたどると、ほとんど皆、小さいときから大人たちの暴力や侮辱、無視、抑圧、過管理などで傷つけられていた。この子をこうしてしまったのは、誰の責任なのか。そんな怒りと目の

前の現実から、行き場のない子どもたちのシェルターを全国で初めて作った。

虐待から逃げる場所があったら、加害者にならずに済んだと思う。少年院を退所しても、虐待された家にも帰れない。受け入れられない親も。帰る場所がない子どもたちは被害者にもなる。「一カ月でも安心して過ごせる場所、今晚野宿しないでいい場所があれば」。夢の実現は五十歳のとき。きっかけはその二年前、夢を描いた劇の上演だった。

東京生まれ。幼児洗礼を受けるが高校一年でカナダに留学後、教会を離れ、哲学にの

めり込む。同級生だった作家の森まゆみさんは「いつもニコニコ穏やか。正義感が強く物事をまっすぐに見るのは昔から変わらない」。大学も哲学科に進むが、自立するため司法試験に挑み、一年休学して勉強し、卒業の年に合格した。司法修習中に結婚、三十三歳のとき「子どもの人権」相談員に。「子どもがいながら気楽に」。それが。いじめ、不登校、虐待、非行、自分の無力さに相談を求めようとも思った。でも転んでも立ち上がっていく子どもたちの姿は、希望そのもの。自分こそ励まされた。

「少年非行の防止に関する国連ガイドライン」は子ども

の問題行動や非行は、小さいころから受けた人権侵害の結果で、人権侵害をなくせば予防できると記す。自分が出会った少年少女も同じだった。そのための手段は「子どもと大人の全面的かつ対等なパートナーシップ」とある。「上から下を見た大人の干渉は逆に虐待や非行の温床になる。完全な対等なんです」

四十歳のとき、都にできた少年事件当番弁護士制度を紹介する演劇を弁護士有志で上演した。中高生にも声を掛けて。楽しくて毎年続いた。三作目から脚本を担当。二〇〇二年の九作目が「こちら、カリヨン子どもセンター」。子どもたちのための弁護士事務所が

あり、リンチの片棒を担がされた少年や義父から性虐待を受けた少女がシェルターで守られ、立ち上がっていく。児童相談所に一時保護機能があがるが、小さな子どもたちで常にいっぱいいた。民間では親権の壁も大きい。民間では「かできたら」の夢だった。

見た人から「センターはどこにあるの」「作って」の反響があまりに大きかった。すぐ話し合いを始めた。報道もされ、寄付や家の提供、スタッフの申し出があり、〇四年NPO法人「カリヨン子どもセンター」が運営する「カリヨン子どもの家」がオープンした。今までに五十二人が、平均一カ月滞在し、弁護士の

支えを受けて次のステップを探った。児童相談所と一時保護委託の協定も結ばれた。翌年には、長期に生活できる自立援助ホームの男の子用が、今春には女の子用もできた。

愛知でも弁護士らが来春のシェルター開設を目指してNPO法人「子どもセンターバオ」設立準備を進める。「同じような灯があちこちで灯ってほしい」

傷ついた子に救いの家



弁護士事務所とカリヨンの事務所は同じ。カリヨンはたぐさんの鐘の演奏装置。子どもたちが個性を発揮し社会で美しい音を奏でてほしいとの願いがある。東京都文京区で

人の子どもたちと一緒にいられないのは寂しいけれど、あるとき子どもに「坪井さんってアンパンマンみたいだね」と言ってもらった。助けを呼べば必ず駆けつけてくれるって。ものすごくうれしかった。

珠玉のとき

弁護士の仕事でも「子どもの家」の仕事でも、終わりや別れは皆あるんですけど、そのときに大人からでも子どもからでも、「坪井さんに会えて良かった」と言ってもらえるのが一番うれしい。一人

たちを守ることもあると思う。自分の三人の子との違いは感じない。周囲の支えがなく孤独なら、同じだと思っから。

四十六歳のとき、教会に戻った。虐待で「なくなった子どもたちの前では、本当になすべがない」「せめてこの子たちを抱いてください」。神に祈らずにはいられなかった。

「私たちは何もできない、そこから出発しよう。できるとしたら、子どもをひとりぼっちにしないこと。子どもと一緒にのおおる。共に苦しみ生きていこう」。今もよくスタッフと話す。

「そつしたら自分の足で転びながらも生きていけるから」。子どもの力を真に信じている人だった。あなたはどろですか。(野村由美子)